

Y09b 久米通賢に関する調査・研究 ～新史料に基づく文化8年彗星の観測精度の検討～

松村雅文、北林雅洋(香川大教育)、松本共平(高松市立太田南小学校/香川大教育)、木原溥幸(徳島文理大)、西川桂子(鎌田共済会郷土博物館)、萩野憲司(東かがわ市歴史民俗資料館)、御厨義道、藤田彰一、芳地智子(香川県歴史博物館)、嘉数次人(大阪市立科学館)

久米栄左衛門通賢(1780～1841年)は、高松藩領において、天体観測や計算のみならず、測量機器、時計、鉄砲や大砲などの製作、讃岐の測量、塩田開発、銅山設備の改良、港湾の構築などの多くの事業を、高い水準において成し遂げた人物である(香川県歴史博物館編『久米栄左衛門～創造と開発の生涯～』、2002)。天文や測量に関しては、日本で初めてパーニヤ副尺の原理を理解し、自作の機器に応用している(中村、澤田、長谷川、2000)。

久米に関する史料は、鎌田共済会郷土博物館(香川県坂出市)を中心に、豊富に存在することが知られている。2002年には、同博物館内で新たな史料も発見されている(西川(2003)、中村・御厨編『久米栄左衛門研究の新展開』、2003)。しかし久米の体系的な研究は、必ずしも進んではない。そこで我々は、久米の新出・既存の史料を調査して総合目録を作成し、久米に関する諸問題の研究を行うことを目的にして、2004年度から活動を行っている。現在までに、同博物館の久米に関する史料の大半が調査され、デジタルカメラによる撮影等が行われた。

ここでは特に、久米による1811(文化8)年の彗星の位置観測の記録について報告する。新史料に残された20夜の記録と、久米自身が整約した6データについて検討した結果、観測数は少ないが、観測精度は $0.04 \sim 0.10^\circ$ 程度であり、当時の大坂や江戸での観測精度(渡辺(1987)によると $0.1 \sim 0.2^\circ$)に劣らないことを見出した。